

海運の重要性を学校教育の場で
～東京都内で出前授業と海事施設見学会を実施～

当協会は、海運をはじめとする海事産業の重要性を学校教育において取り上げていただくよう、海事施設等の見学会や出前授業、資料提供の実施等に取り組んでおります。

1月29日（木）に関東運輸局と協力し、府中市立府中第十小学校の5年生119名を対象に、船長講話と海事施設見学会を実施しましたので、その模様をお知らせします。

当日は、東京臨海部広報展示室「TOKYO ミナトリエ」で、当協会の木村課長（船長）による船長講話と展示室見学を実施したほか、南極観測船「宗谷」を見学しました。

TOKYO ミナトリエでは、2グループに分かれて、展示室見学と、船長講話を実施しました。

展示室では、東京港の成り立ちや歴史、港湾での荷役作業に関する展示等を見学し、東京港について学びました。同施設は地上100メートルから東京港を一望でき、当日は天気も良く、眼下に荷役作業をするガントリークレーンや大小さまざまな船を見ることができました。特に望遠鏡には多くの児童が集まり、港の様子を観察していました。



望遠鏡でコンテナターミナルを見学

船長講話では、まず日本の貿易量の99.5%を海運が担っていることや、一度に2万個以上のコンテナを積める世界最大級のコンテナ船等を紹介しました。

次に、船上での生活や、航海士と機関士の仕事内容等について写真やクイズを交えながら紹介しました。特に、貨物船の船員数クイズでは、「100人!」「20人!」とたくさんの手が挙がり、盛り上がりました。正解発表の後、貨物船の船員約20名は、それぞれWi-Fi完備の個室が与えられることや、船内では司厨長の作る美味しい食事が食べられることを写真とともに説明し、児童からは驚きの声があがりました。



貨物船の船員数クイズの様子

ミナトリエの後は、南極観測船「宗谷」を見学しました。日本初の南極観測を成功させた同船は、1938年に耐氷型貨物船として建造され、終戦後には引揚船や灯台補給船となり、1956年から1962年まで南極観測船として活動しました。その後は海上保安庁の巡視船として活躍し、1978年に退役しました。児童は、当時の様子が再現されている観測隊員居住区や、操舵室、機関室、通信室、食堂等を見学し、船内設備や宗谷の歴史について、理解を深めていました。



南極観測船「宗谷」



操舵室見学の様子

当協会は、出前授業等を通じて、海運をはじめとした海事産業を学校教育において取り上げていただけるよう、引き続き活動を展開してまいります。

以上